
魔法少女リリカルなのはStrikerS K H

ニクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers KH

【Nコード】

N2349Y

【作者名】

ニクス

【あらすじ】

キングダムハーツのソラとリクが、『魔法少女リリカルなのはStrikers』の世界に来てしまった。

まだ見ぬ世界へ（前書き）

はじめまして、ニクスと申します。

初めて執筆しますので、誤字脱字や表現が下手かもしれませんがよろしく願います。

まだ見ぬ世界へ

光と闇の間の世界で、ソラとリクが協力し、ゼムナスを倒すことができた。

その空間に存在する見知らぬ浜辺にいた二人の前に、流れ着いた瓶の中にはかつてデスティニーアイランドの浜辺に流したカイリが書いた手紙が入っていた。

カイリの手紙を読み終え、目の前に光が差し込み扉が開いた。それを見た二人は、共にその扉の中に入っていた。

これで自分たちの世界に帰れると思った二人だったが、

だが、その世界は二人の知らない世界だった。

まだ見ぬ世界へ（後書き）

どうだったでしょうか？

まだ一話だから表現が下手かもしれませんが、これからもよろしく
お願いします。

ここは、何処だ？（前書き）

どうもニクスです。
連続投稿です。

ここは、何処だ？

ミッドチルダの郊外の森

そこには、ソラとリクが眠っていた。

『う、うん。あれ？ここは、何処だ』

『おい、リク！起きろよ！』ソラは、リクを起こし始めた。

『なんだよ。ソラ、何かあったのか？ってここ何処だ？』

リクは、周りのを見渡した。

二人の知っている世界なら、海の近くなので、波の音が聞こえてくるはずだ。

だが、ここからでは、森の木々が風で揺れている音だけだった。

『なあ、リク。まさか、違う世界に来てしまったのかなあ』

ソラも周りを見て、ここが違う世界だと思い始めた。

『なあ、まだ明るいから少し歩いて進まないか？』

と、リクが提案した。

『確かに森を抜けるには、1日で済むとは思わないけど食料とかも、確保しないといけないし、そうするか！』

そうして、二人は森の中を進み始めた。

時空管理局（前書き）

どうもニクスです。

今回は、機動六課の話です

時空管理局

「機動六課 管制室」

「なんだ！この魔力反応は、小規模だが次元震発生した！」

管制室にいたグリフィス・ロウランが、モニターで作業中に魔力反応を観測した。

「八神隊長に報告しないと！」

グリフィスは、すぐに別のモニターを表示し八神はやてに連絡した。

「機動六課 隊長室」

そこには、八神はやてが数日前に起きた事件に関してガジェット・ドローンの情報を見ていた。

「前の事件で、新型のガジェットがでた。これは、本格的に動き始めたと考えたほうがええんやろうなあ」

ぴゅっぴゅっ

「はい、こちら八神。どないした？」

「こちらロングアーチ。ミッドチルダ郊外から小規模ですが、次元

震を観測しました。」

「ほんまか！分かった。何があるかわからんから、こっちからスタ
ーズとライトニングの連絡するわ」

はやては、ロングアーチからの連絡を受け、すぐに念話でなのはと
フェイトに報告した。

（こちらははやて、なのはちゃん、フェイトちゃん聞こえるか）

（聞こえるよ。はやてちゃん）

（こっちも、聞こえるよ。はやて）

（あんな、ついさつき小さいけど次元震が発生したんや。悪いんだ
けど、ちよつと見てきてくれへんかな？）

（わかった。こっちは、フォアードのみんなに伝えてから行くから
フェイトちゃん先に行つて）

（うん、いいよ。それじゃ先に行くね。なのは）

そして、フェイトはすぐに移動した。

「バルディッシュ、セットアップ」

フェイトは、バリアジャケットを身にまとい、飛び立った。

「こちら、ライトニング1からロングアーチへ。次元震が発生した
場所をバルディッシュに送ってもらえるかな？」

「こちらロングアーチ。座標データを今から送ります」

「マスター。座標データを受信しました」

「バルディッシュ、見せて。ここから少し行った先の森かあ。もし
かしたら時空漂流者かもしれない。生命反応があったら教えてねバ
ルディッシュ」

「了解しました。マスター」

そして、移動し始めた。

く訓練所く

そこには、なのはとフォアードたちがいた

「はい、みんなあ。訓練の途中なんだけど、急用が出来たので今
日はここまでにします。前の事件から続けて訓練してるからちゃん
と体を休ませてね。」

「はい」

「では、解散」

そう言うと、疲れ気味のフォアードたちは機動六課の隊舎に戻って
行った

「こちら、ロングアーチからスターズ1へ。次元震があつた場所の座標データを送ります」

「了解」

「受信しました。マスター」

「ありがとう、レイジングハート。それじゃ、いこうか」

「レイジングハート セットアップ」

なのはもバリジャケットを身にまとい移動した。

時空管理局（後書き）

個人的ですが、感想をもらえると嬉しいですね。
SEEDさん、感想ありがとうございます。
これからもお願いします

出会い（前書き）

どうもニクスです。

今回、ソラ達となのは達が出会います
では、どうぞ

出会い

くミットチルダ郊外の森 上空く

先に、出勤したフェイトが周囲の探査を開始していた。

「この辺が、反応があった場所だね。バルディッシュ、生命反応はある？」

「はい、反応が二つあります。生命反応から人です。共に現在、移動中です」

「時空漂流者だね。すぐに、会って保護しないと」

「こちらなのは、もう少しで目的地に付くよ。フェイトちゃん、何か変わったこととかあった？」

「あ、なのは。もしかしたら時空漂流者かもしれないんだよ。それで今から会いに行ってみるね」

「了解。それじゃ、こっちも急いで向かうね」

「うん、分かった。それじゃね」

フェイトは、ソラとリクたちのいる場所に向かった。

く森の中く

ソラとリクは、共に行動していた。

「うーん、それにしてもなんにもない森だな。それに広いなあ」

「どうしたソラ、ギブアップか？」

リクは、ソラに向かってつぶやいた。

「ギブアップなんか関係ないだろう、リク。それに広すぎるだろ。この森」

「たしかに、いくら歩いても全然変わらないからな。うん？」

リクは、近づいてくる者に反応し、手にソウルイーターを構えた。

「どうしたリク？なんでソウルイーターを出してんだよ？」

「静かにしろソラ、何か来る！」

「え！本当かよ！」

そしてソラも、キブレードだし構えた

すると、上から金髪の女性が降りてきた。

「あんた、何者だ。敵か」

リクは、冷静に女性に向かって話した。

「え？敵？ 違うよ。私は、時空管理局の者です。ただお話をしたいだけです。武器を下ろしてくれるかな？」

女性は、ソラとリクに話した

「じくうかんりきよく？なんだそれ？」

ソラは、女性が話したことが分からなかった

「え〜とね。君たちがいた世界や他にもたくさんある世界を管理している仕事のことなんだ。

それで、この近くで魔力反応があつたから調べにきたんだけど、君たちの反応を見つけたから来んだよ。君たちの服装や武器を見ると違う世界から来たみたいだね」

「やっぱり違う世界にきたんだな、俺たち。」

ソラは、リクに向かって言った

「そつらしいな」

「あれ？なんか別世界になんども行ったことがあるの？」

女性は、二人の言っていることを聞いて質問をした

「うん、結構いろいろな世界に行ったことがあるから慣れたかな」

ソラは、女性の質問に答えた

「そうなんだ。あつ自己紹介がまだだったね。私は、フェイト・T・

ハラオウン。よろしくね」

「俺は、ソラ。こっちはリク」

お互い自己紹介をした

「フェイトちゃん」

「あつなのは」

すると今度は茶髪の女性が降りてきた。

「ごめんねえ、フェイトちゃん。遅くなつて」

「ううん、ついさっき彼らに出会ったところだよ。」

「はじめまして、私、高町なのはです」

なのはは、二人に自己紹介をした

「二人は、ソラとリク。こっちの世界にさっき来たみたい」

フェイトは、ソラとリクをなのはに紹介した。

「そうなんだ、二人とも悪いんだけどこれから私たちのいる機動六課に行つて君たちのこととかいろいろ聞きたいから連れていくけど、いいかな？」

なのはは、二人に質問をした

「ソラどうする？」

「このまま森にいたらどうなるかわからないし、それに『この世界』のことも知っておきたいからな」

二人は、なのは達について行くことにした。

出会い（後書き）

あんまり上手く表現できない。
アドバイスなども募集中です

ソラたちの世界（前書き）

どうもニクスです。

アクセス数が2000を超えました。

自分でもびっくりしました

今回は、ソラ達の世界をなのは達に説明する話です。
では、どうぞ

ソラたちの世界

「機動六課前」

ソラとリクは、なのは達と共に移動して現在、機動六課隊舎前に来ていた

「ここが、私たちが働いている機動六課だよ」

「すげー、ここでののはさんとフェイトさんが働いてるんだ」

ソラは、隊舎の周りを見て驚いていた

「それじゃ、君たちのことを聞きたいから案内するね」

4人は、隊舎の中に入って行った

入ってすぐに、なのはの目の前にモニターが開かれた

「おかえりなさいですう。なのはさん、フェイトさん。あれ？そちらのお二人は誰ですか？」

「彼らはね、さっき起きた次元震でこっちの世界に来てしまったみたいなんだよ。それでねリイン、はやては部屋にいる？」

「はい、いますよ。」

「それじゃ、今から行くからはやてに伝えておいてね」

「分かりました。それじゃ、お部屋で待ってますからね」

そしてモニターでの通信が終わった

「それじゃ、行こうか」

（隊長室前）

コンコン

なのはは扉をノックした

「入ってええよ」

すると、中から返事が聞こえた

「今戻ったよ。はやてちゃん」

「ありがとなあ。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「はやて、彼らが現場のところにいたから連れて来たよ」

「ようこそ。機動六課隊長の八神はやてです。よろしく」

「二人とも、早速だといくらか質問するけどええかなあ」

「はい」

二人は、答えた

「まずは、君たちの世界はどんな所だった？」

「俺たちがいた世界は、小さな島があるごく普通の世界です」

「え？ そうなの。」

「でもさっきほかの世界に、行ったことがあるって言ってたよね。それは、どうして？」

「ちょっと話が長くなるけどいいですか？」

「ええよ。君たちのことを知りたいからね」

「それじゃ、話しますね。きっかけは、小さい時に別世界から女の子が来たのがきっかけです。それまで、自分たちがいた世界の他に世界があることを知らなかったんです。それから俺たちは、世界から出ようと考えました。出発前夜に嵐が来て外に出たんです。外に出ると周りには『ハートレス』と呼ばれる生物がいました。」

「『ハートレス』ってなんなの？」

「それは、後で説明しますね」

「なんとか振り切って、リクに出会うことが出来たんですがリクは闇の中に消えて行ってしまった。俺もハートレスにつかまれ闇に飲み込まれそうになったんだけど、『キーブレード』をおかげで飲み込まれずにすみしました。でも、俺達の世界自体が闇にの込まれてしまったんです。」

「世界が、闇に飲み込まれた？じゃソラたちは、どうやって他の世界行けたんや？」

「俺は、気がついたら違う世界に来てたんだ」

「俺も、闇の中から別世界に行った」

「それから、様々な世界に行つてらリクと再び出会ったけど、俺はリクとカイリを探しに様々な世界にいき、リクはカイリの心を取り戻すために別の世界に行つたんだ。でも、次に出会った時には、オレらは敵同士になってたんだ。」

「え！どうして敵に同士になったんや？」

「それは、この『キープレード』が原因なんだ」

そう言つとソラは、キープレードを出してはやて達に見せた

「大きな鍵やなあ」

「このキープレードは、ハートレスになつてしまった人をもとに戻すことが出来るんだ」

「それじゃ、カイリつて子もそのハートレスになつてもうたんか？」

「いや、カイリの場合は肉体から心が離れるときソラの心の中に入つていたんだ。でもカイリの心を取り戻すためには、心を開放するための闇のキープレードが必要だった。そのために、俺は心を闇に捧げた。」

「リク君、闇に心を捧げてもって大丈夫なの？」

「今は、大丈夫だが初めてのころは闇に溺れて俺に闇の力をくれたア
ンセムって奴に体に乗っ取られたりしたしな。でも、今は自分の中
の力だと認めて使ってる」

「二人の関係や世界に関して、大体分かった。それでな、二人とも
これからどうするんかきめとるんか？」

「いや、どうするも何も考えてないや。今までは、世界を移動する
術があっただけど、今はないんだよ」

ソラは落ち込んだ

「ほんなら、ここにおらへんか？ここなら住む場所や食べ物もある
からええと思うんやけど」

はやては、二人に提案をした

「でも、その分何かあるんだろ」

リクは、何か裏があると思い聞いた

「リク君は感がええなあ。こっちからは、大変申し訳ないけど二人
の力を貸してもらえないかな」

「リク。俺たちは、なのはさん達に助けてもらったんだぜ。お互い
助け合った方がいいだろ」

ソラは、賛成のようだ

「はあく、ソラお前はお人好しすぎるぞ」

リクは、嫌々だが賛成してくれた

「それじゃ、よろしく。ソラ君、リク君」

「呼び捨てでいいよ。よろしく」

「俺も呼び捨てでいい、よろしく頼む」

こうして二人は、機動六課に入隊した

ソラたちの世界（後書き）

こんな感じで、今回はまとめました
多くの皆様、読んでいただきありがとうございます。
これからも、引き続きお願いします

検査と模擬戦 その1（前書き）

どうもニクスです。

今回は、ソラ達の検査などです。

それでは、どうぞ

検査と模擬戦 その1

「機動六課 隊長室」

「それじゃ、今からソラとリクには検査とか受けてもらおうでえ」

「検査？俺どこも悪くないぜ」

「違うよ、ソラ。魔力量や性質なんかを調べるんだよ。もし二人が戦闘に参加するときにこっちの世界の戦いとかも知らないといけないからね。それにデバイスも用意しないといけないし」

「デバイス？」

「ソラ。俺たちがフェイトたちに会った時に二人は、武器を持っていただろ。たぶんアレだ。」

「あゝでも、俺たちはキープレードがあるじゃん。大丈夫なんじゃないか？」

「でも、ハートレスやノーバディには有効だけど、この世界では、どうかかわらないだろ」

「確かに言われてみれば、そうかも」

「あんな、その『ハートレス』と『ノーバディ』ってなんなんや？」

「説明がまだだった。人には、心と肉体があるだろ。『ハートレス』は、人の心の闇が膨らみ続けて完全に闇に染まると、その心はハ―

トレスになって他の人の心に反応して次々人を襲うん存在。『ノーバディ』は、強い心の持ち主がハートレスになった時、体と魂が消滅するはずが異なる世界に生まれてしまう存在なんだ」

リクが、はやてたちに説明した

「なんか、ややこしい存在やなあ」

「中でもノーバディでは人の姿をしている奴がいた。そいつらは、かなり強かった。」

「あいつら一人ずつ武器や特性が強いからなあ」

「そんな敵とソラたちは、戦ってたんだね」

「話はここにいる間にいくらでもできるから、早く検査にいくうぜ」

ソラは、飽きていた。

「そうだね。それじゃ、はやてちゃん二人を検査に連れて行くね」

「うん、おねがいなあ」

そして4人は検査に行った。

（機動六課 医務室）

「シャマル、いる？」

「はい、いますよ」

「こちら、今日から協力してくれるソラとリク。忙しいところ悪いんだけど、魔力測定をおねがいたいんだけどいいかな」

「いいわよ。私はシャマル。ここでみんなの怪我を見たり治したりしてまゝす。よろしくね」

「「おねがいます」」

「それじゃ、検査を始めるわね」
そして二人の検査が始まった

検査の結果は、ソラはランクA A A（-）リクはランクA A A（+）だった

「二人ともかなり高いわね」

シャマルは、検査の内容を見ながら話した

「すごいね。二人とも」

フェイトは、喜んでいた

「後は、一人ずつ模擬戦してもらうけど、二人ともいいかな？」
なのはは、質問した

「おう」「分かった」

二人は、返事をした

く 訓練所 く

「ここが、私達が模擬戦や日々の訓練に使っている所で」
「す
なのはが、訓練所を紹介した。
でも、ソラ達から見ると何にもない場所であつた。

「何にもない所なの？」

「違うよ。待ってて今から出すからね」

「出す？」

ソラには、どうゆうことかわからなかった

隣でなのはは、モニターで何やら操作をしているようだ

「はい。終わったよ」

と、言った時何もない広場から突如ビルがそびえたつた

「うわっ！？ビックリした」

ソラは、驚きを隠せず言った
リクも驚いた表情でいた

「にやはは、驚かせてごめんね。」

「さっき言った通りここで、模擬戦してもらいます。対戦相手は、

シグナムとフェイトちゃんがしてくれます」

「シグナムって誰？」

「待たせてすまん。高町、テストロット」

二人は、声の方向を見ると桃色の長髪の女性が立っていた

「私は、シグナム。今回君たちの模擬戦の相手を担当する。よろしく頼む」

すると、シグナムは手を差し伸べた

「ソラです、よろしく」

「リクです、よろしくお願いします」

二人は、シグナムに握手をした

「ああ、二人とも全力で来い」

「それじゃ、ルールだけど時間無制限。対戦相手が行動不能もしくはソラ達が行動不能が決まったら終了だからね。シグナムとフェイトちゃんは、非殺傷の設定でお願いね」

「それじゃ、対戦組み合わせは、ソラとフェイトちゃん。リクとシグナムです」

「あつすいません。起動した状態のデバイスを出してくれますか？」

「いいよ。バルディッシュ」

フェイトは、バルディッシュを起動した。
そしてリクは、ソウルイーターを出し、剣先をバルディッシュに当たった。

どうやら、剣が当たるか確かめたようだ。

「変わった武器だな」

シグナムは、目をキラキラとさせ興味津々のご様子

「こっちは、非殺傷とかは出来ないんで気をつけて下さい」

「分かった。」

「了解した」

「それじゃ、広場に行ってソラとフェイトちゃんは準備してね」

「行こうか、ソラ」

「おう」

二人は、広場に移動した

いよいよこちらの世界に来てからの初めての戦闘が始まる

検査と模擬戦 その1（後書き）

次回は、模擬戦が始まります。

戦闘シーンを文章にしないといけないので更新が遅れるかもしれませんが

せん

まあ今回も、だいぶ考えて書いたんですけどねw

上手く書けているかわかりませんが、アドバイスや感想があると参考になりますので、引き継ぎよろしくお願いします

検査と模擬戦 その2（前書き）

どうもニクスです。

今回は、ソラとフェイトの模擬戦が始まります
では、どうぞ

検査と模擬戦 その2

〈訓練所〉

ソラとフェイトは、訓練が始まるのを待っていた。

（こっちの世界で、初めて戦うからなあ 気を付けないとな。それに魔法とドライウゝも試しておかないと！出し惜しみなしの全力でいこう）

ソラは、張り切っていた。

（ソラは、どう戦うのか楽しみだなあ）

フェイトは、目をキラキラ輝かせていた。

「二人とも準備はいいかな？」

「はい」

「うん」

「それじゃ、レディー・ゴー」
なのはの開始宣言で、二人とも動いた。

ソラは、フェイトに向かって走って行った。

（まずは、普通に攻撃しよう）

「でやあ、はっ」

攻撃の隙をつかせない為に連続で攻撃した
フェイトは、簡単にソラの攻撃をすべてガードした

（やっぱり簡単に防がれるか）

そう思ったソラは、後ろに後退した。

（んじゃ、魔法で繋げる！）

ソラは、キープレードを前にかざした。

「ファイア！ファイラ！ファイガ！そして、エアロガ」

キープレードの先から炎属性の魔法を放ち、次にキープレードを後ろに構え風属性の魔法をブースターとして使ってソラは特攻した

「え！？くっバルディッシュ」

「はい、マスター。フォトンランサーシュート」

フェイトは、驚いていた。

ソラの行動が予想外だったからである。

フェイトは、バルディッシュに指示を出しフェイトの周りにある三つの球体を、炎属性の魔法に狙いをさだめ放った

フェイトの魔法は、ソラの炎属性の魔法を打ち消すことはできたが、ソラのスピードが早かった為攻撃を防ぐことが出来ず吹き飛ばされビルに衝突した

「おい、フェイト。大丈夫かー」

ソラは、フェイトが衝突した方向に向かって喋った。

「大丈夫だよソラ。ごめんね、バルディッシュ」

「お気にせず、マスター。それよりも驚きました。彼はデバイスを持っていないのにこれほどできるとは思いませんでした」

「何だかワクワクしてきちゃった」

そう言い、フェイトはビルの中から姿を現した

「それじゃ、今度はこっちから行くよ！」

すると、フェイトは姿を消した

それを見たソラは、辺りを確認した

「消えた！？何処だ」

ソラは、後ろに魔力を感じ何とかガードすることが出来た

「あぶねえ、何とかガードできた」

ソラは、フェイトから距離を取った

「すごいなフェイト。あんなに早く移動できるんだな」

「それじゃ、こっちからも行くぜ。ブレイブフォーム！」

すると、ソラの服は赤色に変化しキープレードを二本持った

「『キープレードが二本！』」

なのは、シグナム、フェイトは驚いていた

見学していたなのは、リクに聞いた

「リク、どうしてソラはキープレードが二本持つてるの？それに服の色が変わったけど・・・」

「それは俺にもわからない。本来キープレードは一人一本しか持てないし、使用するにも選ばれた者だけなんだ。服は、あいつの知り合いがくれたらしい」

リクは、なのはとシグナムに説明した

一方、訓練場ではソラがフェイトに攻撃をしていた

「えいつ！やあ！たあ！はっ！」

フェイトは、ソラが二刀流になった為攻撃の手数が増えガードするのが精一杯だった

「マスター、いったん距離を取りましょう」

「そうだね」

フェイトは、バルディッシュの提案通りにソラから離れた

「結構強いね。ソラ」

「フェイトこそ、あれだけ攻撃しても全然当たらないし息も切れない相当強いな」

「それじゃ、これはどうだ。ウィズダムフォーム」

するとソラの服の色は、青色に変化しキープレードは一本に戻った

「今度は、青色になったね。バルディツシュ警戒していくよ」

「はい、マスター」

すると、ソラは地面を滑るように移動し、キープレードから無数の魔弾が放たれた

（今度は、攻撃が射撃に変わった。連射もかなり速い）

フェイトは、冷静に回避しながらソラの変化を観察していた

「やっぱり、回避されるるよな。なら、マグネラ」

ソラは、磁力の魔法を使った。周囲にある残骸とかは魔法に引き寄せられた

（引き寄せられる！？これじゃ、的にになっちゃう、なら！）

「バルディツシュ！フォトンランサー・・・シュート！」

フェイトは、球体を一つを作りマグネラのコアに向かって放った

コアの周りは、破壊された残骸が集まっていた。フェイトの魔法は、見事コアに的中して周りは砂埃だらけになった

（ちょっとやりすぎたかな？）

突然、砂埃舞う中キーブレードが一本フェイトに目掛けて飛んできた

「マスター危ない！？プロテクション！」

バルディッシュのおかげで防ぐことが出来た。すると防いだキーブレードは、砂埃の中に戻ってた

「ありがとう、バルディッシュ」

砂埃は消えソラの姿が見えてきた

「あれ？また色が違う。今度は黄色になってキーブレードが二本持つてるね」

なのはとシグナムは、モニターでソラの様子を見ていた

「一体どれだけ変われるんだ」

シグナムはつぶやいた

「服の色が変わるたびに、戦闘スタイルも変えて戦ってるね」

なのはは、戦闘を録画していたらしく別モニターで確認していた

「最初の灰色はバランスタイプで、赤色は近接系に特化と二刀流になって、青色は地面を滑るように移動と射撃を使ってるね」

「状況に合わせて戦闘スタイルを変えることができるオールラウンダーだな」

シグナムはそう言った

「進展があつたようだぞ。高町」

訓練場では

「はぁ・・・はぁ・・・」

ソラの体力はだんだん限界に近づいていた

（ダメだ。ここまで体力が削られるなんて思わなかった。いくらマスターフォームになってもあの大剣状態だと一撃一撃が重すぎる）

フェイトは、ザンバーフォームに切り替えて、戦っていた

原因は、フェイトの攻撃をソラは何度か攻撃を流したり防いだりした為である

「これで最後にするよ！ソラ！」

「行くぜ！フェイト！」

二人は、魔力を貯め始めた

「雷光一閃・・・プラズマザンバーブレイカー」

「ラグナロク」

ソラは、キーブレードの先に集めた魔力を分散させ、目標をフェイトに向かって放った

フェイトは、カートリッジをリロードし魔力を刀身に寄せ斬撃を放った

二人の放った魔力は、ぶつかり大きな爆発が発生した

爆発が発生した為、煙が辺を立ち込めたが、見学していた三人からはようやく見えるようになった

そこには、フェイトが立っていた

そして、ソラは爆発に巻き込まれ気絶していた

模擬戦 第一戦 勝者フェイト・T・ハラオウン

検査と模擬戦 その2（後書き）

始めて戦闘シーンを書きました。

書いてると、だんだん文が単調になってしまいました。
すみません

戦闘シーンを文にすると疲れますね
では、次回もよろしくです

検査と模擬戦 その3（前書き）

すいません。更新がかなり遅れました
バイトなどであんまりまとめることができませんでした

検査と模擬戦 その3

〈訓練所〉

ソラは、現在気絶中

フェイトは、ソラを連れてなのは達がいる場所に来た

「ごめん、なのは。ソラを今からシャマルの所に連れて行くね」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。さっきの大技出すときにもう呼んでおいたから」

なのは先ほどの二人が大技を出す体勢になった時急いで連絡したのであった

「来るまで時間がかかるから、ソラには悪いけど次の模擬戦やるよ。シグナム、リクいいかな？」

「当然だ」

「始めてくれ」

シグナムとリクは、返事をした。

シグナムは、先ほどの模擬戦を観戦して表情には出さないが、かなり興奮していた。

そして、二人は移動した

〈訓練所 広場〉

「リク、お前はどんな風に戦うんだ？」

シグナムがリクに質問した

「始まればわかるだろ」

リクは、シグナムの質問に答えた

「ほう、なら私を楽しませてくれ」

「それじゃ、模擬戦2戦目レディー・ゴー！」

「行くぞ、レヴァンティン」

シグナムは、開始の合図と共に突撃した

一方、リクはソウルイーターを構えただけだった

二人の武器は、互いを押し付け合う形になったがリクは、攻撃を受け流しシグナムの腹部に蹴りをいれた

その結果、シグナムは吹き飛ばされたがすぐに大勢を整えた

だが、シグナムはリクに視線を向けた時陸の姿がそこには無かった

「どうした？こんなもんか」

リクは、シグナムの後方にいて挑発した

「ほう、ずいぶん余裕だな。なら来てみるがいい」

「なら行かせてもらっぜ」

リクは、体の周りから黒いオーラを出し姿を消した

「またか」

シグナムは、姿を消したリクを見てつぶやいた
後ろから殺気を感じシグナムは振り返った

そこには、リクがものすごいスピードで突っ込んできたがシグナムは回避した

リクは、攻撃を回避されたまま突っ込み続けていたが、また姿を消した。この攻撃が全方向から繰り出されたのだ

「それが、お前の力か。」

そう言うとき高くジャンプして回避した

「ダークカノン」

リクは、攻撃をやめ闇の力を手に集中させ放った

すぐにシグナムは剣で薙ぎ払った

（さてこれからどうするか。あんまり攻撃しても防がれてばかりだし、少しの間あれを使うか）

リクは、体全身を闇の力で纏った。

これを好機と見たシグナムは攻撃を開始し、リクに斬りかかった。
たがこの攻撃は、黒い霧に防がれた。その霧は、形状を変え人に近い物になった。

シグナムは後退し、リクをみた

「なんだアレは！」

シグナムの手は、小さく震えていた
そこには、リクの後ろに黒い人に近い物がいた

「これが俺の力だ！」シグナムは、自分の体が小さく震えているのに疑問をもった

（何故私は、震えている？あの黒い物を見た途端震え始めた。これが、恐怖だということか？だが！）

「私は、烈火の騎士シグナム！こんなことで私は、負けない！」

シグナムは、恐怖を打ち払うように攻撃を与えた
だが、リクの闇により全て防がれた

「レヴァンティン、カートリッジリロード！紫電一閃！はあああ！」

レヴァンティンのリロードで魔力を倍増させリクに一撃を与えた
その攻撃は、リクを少し後退させ腕にダメージを与えた

（こいつの腕にダメージを与えたか。これ以上は長く使つとまずいな）

するとリクの周りの闇は消えた

「何故使うのをやめた」

リクの行動を見て、シグナムはリクに質問した

「この闇の力は、ダメージはそのまま使用者にもくるからな。なら、俺のキープレードを見せよう」

するとリクの手に先ほどまで使っていたソウルイーターに似たキーブレードを出した

「このキーブレードの名は、ウェイトウザードン」

「ほう、先程の武器を触媒にしたキーブレードか」

「んじゃ、行かせてもらっぜ」

リクは、攻撃を再開した

一方、観戦側ではソラが目を覚ました

検査と模擬戦 その3（後書き）

また、更新などが遅くなるかもしれません
では、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349y/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS KH

2011年11月21日12時37分発行